書評・紹介

Marek Mejor:

Vasubandhu's Abhidharmakośa and the Commentaries Preserved in the Tanjur

福田琢

一

すぐれた仏典の例に漏れず、世親（Vasubandhu）の『阿毘達磨倶舎論』（*Abhidharmakośabhāṣya*）は豊かな注釈学的伝統を生んだ。本国インドで成立した注釈書に限ってみても、本論の語義注解を内容とする正統的な釈疏はもちろん、本論から重要な記述を抜き出して編纂された抄本、あるいは本論に引かれている経典類のみによって編まれた特異な資料集に至るまで、実に多彩な「倶舎論注」のヴァラエティを見ることができる。

ただしそれらの原典は一本を除いて現存していない。今日インド成立『倶舎論』注を最もまとまったかたちで擁しているのはチベット訳、すなわち西蔵大蔵経タンジュールの経疏部門である。

本書はそれらタンジュール所蔵インド系『倶舎論』注釈のすべてを取りあげ、それぞれのテクストの性格を比較考察した研究である。本文中には各釈疏から実際の記述が豊富に引用されており、いわば資料篇付きチベット訳所収『倶舎論』関連文献概説書としての体裁をそなえている。また冒頭には本論である『倶舎論』をめぐる若干の考察が、序論として添えられている。

著者マレック・メイヤー博士（ワルシャワ大学、ポーランド）について評者は多くを知らないが、すでに本書の翌年には次の著作 *Kṣemendra's Bodhisattvāvadānakalpatā, Studies and Materials*, Studia philologica Buddhica Monograph Series VIII, (Tokyo 1992)が東京の国際仏教学研究所から出版されており、また本書中に、近くヴィールヤシュリーダッタの『決定義経注』や世親の『縁起経釈』についての研究を公刊することを予告するなど(p. 18, note. 74; p. 60, note. 274)、その活動ぶりはきわめて意欲的である。なお本書の文献目録には、"A Contribution to the Biography of Vasubandhu from Tibetan Sources" *Tibetan and Buddhist Studies, Commemorating the 200 th Anniversary of the Birth of Alexander Csoma de Kőrös* (Bibliotheca Orientalis A Hungarica XXIX: 1–2, Budapest 1984) と "Kloṅ rdol bla ma's Explanatory Notes on the Abhidharmakośa of Vasubandhu" *Tibetan Studies. Proc. of the 4 th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Schloß Hohenkammer 1985* (München 1988) という、同氏の手になる二編の関連論文が挙げられている。

二

本書は大きく二部から成り、第一部にあたる **I. Introduction** (pp. 1–25) では、先にも述べたように『倶舎論』とその作者にかんする問題が扱われる。

周知のように『倶舎論』の仏教文献史的な位置づけと作者世親の生涯および著作については、すでに数多くの研究がある。この第一部はそれらの成果と関連資料を整理し、『倶舎論』注釈文献を考察するにあたっての序論としたもので、とくに著者独自の見解が提出されているわけではない。したがってこれについては詳しい内容には立ち入らず、以下に目次に沿って全六章の概要を紹介するだけにとどめておきたい。

【1. Problem of the date of Vasubandhu】 世親の生存年代を五世紀とする高楠説 (J. Takakusu "A Study of Paramārtha's Life of Vasubandhu and the Date of Vasubandhu" *JRAS*, 1905) と、四世紀とするペリ説 (N. Péri "A propos de la date de Vasubandhu" *BEFEO* XI, 1911) とが言及された後、いわゆる《世親二人説》(E. Frauwallner "On the Date of Buddhist Master of Law Vasubandhu" *Serie Orientale Roma* III, 1951) が紹介される。著者は従来の説に生じた矛盾を解消する画期的な仮説としてこのフラウワルナー論文の内容を高く評価する。ただし最終的な判断は避け、少なくとも『倶舎論』作者としての世親は五世紀 (400—480) の人であった、と結ぶ。なお注釈文献に基づく《二人説》の検討は本書第二部に譲られる。

【2. Biographies of Vasubandhu】 真諦『婆藪盤豆法師伝』と玄奘『大唐西域記』、およびプトンとターラナータの『仏教史』から順次に世親伝が要約紹介される。全てに共通する要素は、かれが『倶舎論』を著して衆賢の反駁を受けたこと、そして兄無着の影響で大乗に転向したこと、という二点のみである。

【3. Works of Vasubandhu】 真諦『婆藪盤豆法師伝』、玄奘『西域記』、デンカルマ目録（著者名については東北目録と照合）、プトン『仏教史』のそれぞれに基づく四種類の世親著作目録が列挙され、さらに近代以降の学者による成果として、《世親二人説》を前提に二群に分けられたもの (J. May "La philosophie bouddhique idéaliste" *Asiatische Studien/Etudes Asiatiques* XXV, 1971, pp. 285–296, note 49, 63, 81, 82)、二人説を採用しないもの（山口益『世親の浄土論』法蔵館、京都、1966, pp. 4–14）という二種類の著作リストが取りあげられ、検討される。

【4. Vasubandhu's teachers, disciples, commentators and opponents】 真諦伝、『西域記』、およびプトン史とターラナータ史に伝承される世親の師、弟子、注釈家あるいは対論者たちの名が列挙され、かれらと世親の関係が概説される。また『成唯識論』の十人の論師と、玄奘門下の中国倶舎学者、普光、法宝、円暉も併せて紹介される。次に、『順正理論』と『顕宗論』の作者、衆賢については別項を設けて資料を整理する。最後に『アビダルマディーパ』の作者 (Dipakāra) と、世親お

よび称友の影響下にある『決定義経注』(*Arthaviniścayasūtra-nibandhana*) の作者ヴィールヤシュリーダッタ (Viryaśridatta) に言及する。

【5. The Abhidharmakośa and the Sarvāstivāda Abhidharma】 従来の主要な研究成果に基づき、いわゆる六足・発智・婆沙および『心論』系論書と『倶舎論』との関係が報告される。

【6. The Abhidharmakośa in Tibetan】 まずチベットにおける『倶舎論』伝来・訳出の経緯と当時の仏典翻訳状況が、チベット訳『倶舎論』奥書の記述などに拠って述べられる。次にデンカルマ目録、プトン史、およびロンドルラマ (Klong rdol bla ma Nag dbang blo bzang, 1719-1805) の『倶舎論』解説書 (Ngan rig pa mngon pa'i sde snod kyi don bsdu ba'i ming gi grangs, Lokesh Chandra ed. *Collected Works of Longdol Lama*, Vol. 13. New Delhi 1973, Śata-Pitaka Series 100) といった諸資料に記録されているチベット将来『倶舎論』関連文献名がそれぞれリストアップされる (ロンドルラマの解説書については池田練太郎「チベットにおけるアビダルマ仏教の特色」『東洋学術研究』21—2, 1982 を参照されたい)。

III

以上が **I. Introduction** の概略である。ここでひとつ注意しておきたいのだが、本書において参照される研究成果は、基本的には欧文のものに限られている。前頁で山口益の日本語著作が用いられていることを述べたが、これは平川彰・他『倶舎論索引I』序論の英文紹介記事 (Introduction p. xi, note. 20) から間接的に引かれたものである。また漢文文献への言及も、すべて二次資料 (欧文圏での翻訳および研究) に基づくもので、直接テクストが参照されているわけではない。たとえば有部論書を概説するなかで『阿毘曇心論』を『発智論』より古いと断定している点 (p. 20) などは気になるが、その論拠はフラウワルナーの著作 ("Abhidharma-Studien III" *WZKS* 15, 1971, p. 72) に全く委ねられている。

続いて紹介する本書の本論部分、**II. Commentaries on the Abhidharmakośa from the Tanjur** (pp 27–110) においても事情は同様であり、残念ながらそのことは、以下の本書の記述の確実さとオリジナリティに一定の限界を与えてしまっている。

周知のごとく、アビダルマ文献研究分野における漢文資料の価値は質的にも量的にも非常に重要である。とくに本書のように『倶舎論』諸注釈の比較研究を主題とする場合、漢文のみ遺されている衆賢の二著作、とりわけ『順正理論』はひとつの鍵を握る文献といっても過言ではなく、その詳細な読解は関連文献にかんする数多くの有力な情報を提供する。またアビダルマ研究の比較的盛んなわが国では、そのような漢文資料をも駆使した考察が着実に積み重ねられており、今日ではきわめて高い水準に達している。

そのいずれをも限られた二次資料によってしか参照しえなか

ったために、この第二部において、著者はしばしば、漢訳資料を用いれば容易に確認できる事実を推論のみにたよって考察しており、あるいは、すでに日本語論文によって論証済みの問題に、改めて独力で取り組む結果となっている。

そこで以下本稿では、本書には言及されていない対応漢文資料やわが国の研究成果にも触れながら、この第二部にやや詳しく論評を加えてゆきたい。内容は全八章に分かれ、章ごとにひとつづつ注釈が取り上げられており、その作者名と書名がそのまま各章のタイトルともなっている。

【1. Vinitabhadra's / Saṅghabhadra's Sūtrānurūpā】 このテクスト（Peking. 5592, Tohoku. 4091）の作者は、デルゲ版およびチョーネ版では 'Dus bzang すなわち『順正理論』『顕宗論』の作者と同名の Saṅghabhadra（衆賢）とされているが、北京版のタイトルには 'Dul bzang（＝Vinitabhadra）とある。そのため東北目録はこれを衆賢の『顕宗論』のチベット訳と見なし、一方、影印北京版は作者名を調伏賢（Vinitabhadra）としながら、書名については東北目録を継承して『顕宗論』としている。しかしその内容が『倶舎論』を二分の一ほどに切り詰めた省略本であり、『顕宗論』と関係ないことはすでに報告されている（cf. 櫻部建「アビダルマ論書雑記一、二（二）」国訳一切経月報「三蔵」105, 1975；『三蔵集』三に再録）。

これに対して本書はこのテクストの作者名を Saṅghabhadra と見なす。というのは、他の『倶舎論』注釈書、すなわち安慧釈や満増釈においても、デルゲ版やチョーネ版が 'Dus bzang と紹介する論師を、北京版だけはしばしば 'Dul bzang と呼んでいるからである。しかもその北京版のみに見られる 'Dul bzang＝Vinitabhadra 説なるもののうち、満増釈における幾つかの例は、称友疏に引かれる衆賢（Saṅghabhadra）説によく一致している（これについては**【6. Pūrṇavardhana's Minor Commentary】**参照）。したがって 'Dul bzang とは北京版のみに特徴的な誤記であり、正しくは 'Dus bzang すなわち Saṅghabhadra と訂正されねばならない（pp. 29–32）。

実はこの問題は、わが国ではすでに佐々木現順『仏教における時間論の研究』（清水弘文堂、東京、1974, pp. 146–147）によって指摘されており、そこでは 'Dul bzang に Sahantabhadra という原語が想定され、衆賢の異名と考えられている。また北京版の安慧釈や満増釈でしばしば衆賢が 'Dul bzang と表記されることも比較的知られている（cf. 松濤泰雄「タットヴァールタにおける衆賢説—随眠品について—」『三康文化研究所年報』16, 17, 1982, pp. 13–14, note. 2）。ちなみに、本書（pp. 30–32）で北京版安慧釈界品から引かれながら、そのアイデンティファイが結局は断念されている五例の 'Dul bzang 説（To. 24a3, 25b8, 55a4, 102a4, 103b4）も、実は『順正理論』（329b19, 329c18, 334b14, 347b10, 348a18）の衆賢説にほぼ対応することを付言しておきたい（cf. 松濤泰雄「タットヴァールタにおける衆賢説—界品について—」『印仏研』30—2, 1982）。

なぜ北京版だけにこのような誤記（？）が見られるかは不明であるが、本テクストにおいても北京版は、タイトルでは作者

名を 'Dul bzang としながら、続く本文冒頭を「軌範師 'Dus bzang 造、倶舎論注 *Sūtrānurūpā* 始まる」と始めているという (p. 29)。この指摘は注目に価し、少なくとも本テクストの作者名が Saṅghabhadra である可能性は、これによって再び高められたことになる。でははたしてそれは『順正理論』『顕宗論』の作者と同一人物と見なしうるのだろうか。

本書の分析によれば、このテクストは、冒頭に独自の序偈をもたず、『倶舎論』本頌に対する改作が認められない、という点で『順正理論』『顕宗論』とは異なるが、偈頌から「伝説」(Kīla) の語をしばしば削除している点、また全八品の章題を『倶舎論』に拠っており、第九破我品をもたないという点では衆賢の作品と性格を等しくしている (pp. 33-35)。また本テクストのチベット訳者は不明であるが、敦煌写本のなかから同じチベット訳の断片が発見されていること、および訳文のスタイルが『倶舎論』チベット訳よりも未熟であることなどの理由から、翻訳は本論である『倶舎論』が将来され訳されるよりも以前、かなり古くになされたと判断される (pp. 35-37)。

以上の考察を踏まえて、著者は言う《この *Sūtrānurūpā* 注の作者は衆賢であるが、しかしながらテクスト自身はかれの作品のひとつ、おそらくは『顕宗論』を編纂し抄出して写したものであり、またその作業は、あるいはチベット訳者（たち）によるものではないか、と考えることはできる》(p. 38)。しかしこれはいささか強引な解釈と言える。もし作者が衆賢であるとしても、これはやはり『順正理論』や『顕宗論』とは別に作られた『倶舎論』本論の抄本と考えるべきである。なお本テクストはこれまで『シャーストラカーリカーバーシャ』などと呼ばれていたが、チベット訳に見える *Abhidharmakośaśāstrakārikābhāṣya Sūtrānurūpā nāma* というフルタイトルからすれば、本書の著者のように『スートラーヌルーパー』とすべきと思われる。

【2. Yaśomitra's Spuṭārthā】 サンスクリット原典の現存する唯一の『倶舎論』注であり、本章冒頭にも引用されるように、かつてビュルヌフによって「仏教の思弁的分野における尽きざる知識の鉱脈」と讃えられた貴重なテクストである (Peking. 5593, Tohoku. 4092)。『倶舎論』全品にわたる語義注解を内容とする。本章は、まず作者の称友 (Yaśomitra) にかんする資料を整理し、その年代を、六世紀前半に活躍した徳慧より後、七世紀末期のヴィールヤシュリーダッタより前、すなわち七世紀前半と定めた後、四つの小節を設けて論究を進める。

2. 1 Problem of two Vasubandhu 先の Introduction において、本書は《世親二人説》を高く評価しながらも、インド成立文献の扱いについてはなお検討の余地があると言う (pp. 4-5)。それを承けて本節では、《二人説》に関連する称友疏の五つの断片 (Fragm.) が改めて取りあげられる (pp. 42-49)。

Fragm. 1 称友疏序偈 まず称友が『倶舎論』の作者名を世親と明言している事実が確認される。

Fragm. 2 『倶舎論』界品 （「壊れるから色である」という定義によれば無表は色ではなくなるという難に対し）《有余師

は言う、〔無表は、その〕所依（＝大種）が壊れるがゆえに〔色である〕》(Pradhan ed. p. 9, *l.* 20)。この「有余師」は称友(Wogihara ed. p. 35, *l.* 20)、安慧 (Peking. To. 71a1) および満増 (Peking. Ju. 42b1) のいずれによっても「古世親」(vṛddhācārya-Vasubandhu, slob dpon dByigs gnyen snga ma) とされており、また文脈から判断すると、その立場は正統有部 (Vaibhāṣika) と見なせる。『倶舎論』の世親は若干の議論の末に一応この解釈を支持する。なお著者は安慧釈に引かれる衆賢説 (Peking. To. 71a4) がこの古世親説を批判すると言うが、『順正理論』(338a21) と併せて判断する限り支持されている。

Fragm. 3 『倶舎論』世間品（十二縁起において無明の因が説かれない理由）《有余師は言う、ある経に、無明は非理作意を因とし、非理作意は無明を因とする、と説かれている。そ〔の非理作意〕は取に含まれるから、ここですでに言われたことになるのである》(Pradhan ed. p. 135, *l.* 6) 称友はこれを「如意 (Manoratha) 師の親教師 (upādhyāya) である長老世親 (sthavira-Vasubandhu) の見解とする (Wogihara ed. p. 298, *l.* 6)。安慧および満増は審らかにしない。なお『倶舎論』は続いて、これをさらに複雑に発展させた観のあるシュリーラータの説を紹介しており、著者はこの点に注目する。

Fragm. 4 『倶舎論』業品（無因論者の説）《ある者が、光明は〔それを〕住させる因がなくなることによって（中略）滅すると考えるなら、それもまた不合理である》(Pradhan ed. p. 193, *l.* 21) 称友疏梵本 (Wogihara ed. 349, *l.* 8) には「長老世親」(sthavira-Vasubandhu) の説とあるが、奇妙なことにチベット訳 (Peking. Chu 4a4) はこれを「長老世友」(gnas brtan dByig bshes)、安慧 (Peking. Tho. 124a7) および満増 (Pekiming. Nyu. 6a7) はシュリーラータの説とする。

Fragm. 5 ここではいわゆる「先代軌範師」(pūrvācārya) 説が取りあげられる。フラウワルナーは、称友がそれを「無着などの Yogācāra たち」と呼んでいる点に着目して、無着は称友よりかなり以前の古師 an old master＝pūrvācārya であったと見なす。そしてこれを、古世親（無着の実弟）の年代 (320—380) を新世親 (400—480) より引き離すひとつの傍証とするのである。しかし著者の考察によれば、pūrvācārya とはある特定の思想伝統（ここでは瑜伽行派）の継承者を意味する表現であって、年代的に過去であることを意味しない。なおこの指摘は袴谷憲昭「Pūrvācārya 考」(『印仏研』34—2, 1986) によってわが国ではすでに確認されている。

以上の考察を経て、著者は称友の示唆する「古世親」像を次のように整理する。かれは如意の師であり、正統有部に属する。その見解が衆賢によって議論され、またシュリーラータ説といわばセットになって言及されていることを考えると、年代的には新世親、衆賢、シュリーラータをそれほど遡らない。

結局のところこの結論は Fragm. 2 と Fragm. 3 から得られた情報をまとめたものだが、両断片の「古世親」を簡単に同一視できるかは問題である (cf. 平川彰『インド仏教史 下』

春秋社、東京、1979, pp. 104-105)。また《二人説》はそもそも世親年代の伝承が四世紀説と五世紀説の二系統に分離する矛盾を解消するために立てられたものである。著者のように古世親の年代を新世親に近づけてしまっては、いささか本末転倒である。

すでに《世親二人説》をめぐる議論は、世親に帰せられている諸著作および瑜伽行派文献の思想的な比較検討を中心課題とする段階に入っている（たとえば松田和信「Vasubandhu における三帰依の規定とその応用」『仏教学セミナー』39, 1984 を見よ）。本書の考察はその水準に届くものではないが、フラウワルナーが用いた称友疏の資料を再検討した成果としては記憶しておくべきかと思われたので、やや詳しく紹介した。

2. 2 *Guṇamati* and *Vasumitra* 称友は序偈のなかで、自身に先行する注釈家として徳慧（Guṇamati）およびその弟子、世友（Vasumitra）の名を挙げており、本文においてしばしばかれらの解釈を検討している。どちらの『倶舎論』注も今日では現存しておらず、また世友については複数の同名の論師が存在するため、伝承資料の扱いには注意を要する。本書は、称友疏に現れる世友が徳慧（480—540）に非常に近い人物と見なせることから、その年代を六世紀中葉とする（p. 52）。なお徳慧には漢訳に『随相論』一巻が現存する。これについては本書（p. 51）でも言及されているが、詳しくは青原令知「徳慧の『随相論』」（『印仏研』41—2, 1993）を参照されたい。青原の報告によれば、これは訳者である真諦の見解が大幅に加えられた『倶舎論』講義録であり、少なくともいま問題となる『倶舎論』注ではない。

さて本節では称友疏に見られる徳慧と世友の『倶舎論』解釈が紹介されるが、そのほとんどはすでに青原令知「倶舎論注釈家 Guṇamati とその弟子 Vasumitra」（『仏教史学研究』32—1, 1989）において日本語訳されているので詳細はそちらに譲りたい（Wogihara ed. p. 6, *l.* 16; p. 13, *l.* 13; p. 132, *l.* 20; p. 350, *l.* 1）。ただし一例だけ問題がある。

『倶舎論』世間品において、中有を否定し、死有と生有の間に断絶を認める余師が登場する。それに対して世親は、穀の相続のごとく、有情の相続は間断なく連続するから、死有から中有、中有から生有へと無間に続生すると考えるべきである、と言う（Pradhan ed. p. 120, *l.* 13）。ここで称友は相続の概念を詳しく解説した後に次のように付け加える《これに対し、自部（svanikāya）に固執して智慧を修する軌範師徳慧とその弟子世友は、注釈の義務を放棄して、他への反論に終始する》（Wogihara ed. p.267, *l.* 25）。この箇所から本書の著者は、断定をためらいながらも、徳慧と世友が化地部（中有否定論者）の所属であった可能性を示唆する（pp. 56-57）。

しかしそう解釈すべきではないだろう。やや微妙なニュアンスを含んではいるが、おそらく称友はここで、徳慧と世友が中有否定論者に対して些末な反論をしていることを軽く揶揄している。そこで続けて《目下わたしたちにとって重要なのは論の注解であって、かれ（中有否定論者）を破することではない》

と言っているのである。

なお前掲青原論文（1989）には、『倶舎論』の説（有部の定説でもある）を世友が批判する例が紹介されている（Wogihara ed. p. 213, l. 33）。この称友の記述を信頼するならば、世友の注釈は、『倶舎論』を批判する場合もある特殊なものと言える。

さて本章はさらに ***2. 3 Vasubandhu's Pañcaskandhaprakaraṇa, 2. 4 The Pratītyasamutpādasūtra*** と二節が続くが、それらは称友疏から回収される世親の『五蘊論』および縁起経典類のサンスクリット断片を、チベット訳ならびに関連資料と共に校訂・紹介した資料篇であるので、論評は控える。

【3. Pūṇavardhana's Lakṣanānusāriṇī Major】 本テクスト（Peking. 5594, Tohoku. 4093）は先の称友疏と同様、語義解釈を中心とした言わば正統的な『倶舎論』注である。作者の満増（Pūṇavardhana）は、プトンによれば《安慧の弟子で翻訳官ジナミトラとシーレーンドラボーディの師》、ターラナータによれば《チソンデツェン王と同時代の人》であるという。本書はその年代をおよそ八世紀後半とする（p. 62）。

わが国では、このテクストがおおむね安慧釈を忠実に踏襲していること、ただし安慧釈に欠けている第九破我品については称友の注釈によく一致していることはすでに知られている（cf. 櫻部建「破我品の研究」『大谷大学研究年報』12, 1959）。ただし安慧、称友の注釈との関係はまだ全面的に検討されているわけではない。より詳細な考察が望まれるところだが、本章はその内容にはほとんど触れず、わずか二頁で結ばれる（pp. 62–63）。満増釈は称友、安慧の注釈と並び称される一本であるだけに、この扱いは少々物足りないと言わざるをえない。

【4. Śamathadeva】 本テクスト *Abhidharmakośaṭīkā Upāyikā*（Peking. 5595, Tohoku. 4094）は、『倶舎論』に引かれる経や律などの原典全文を引用順に集成したアンソロジーであり、『倶舎論』研究資料としてはもとより、有部系阿含資料としても重要視される。その全貌は本庄良文の一連の研究によって明らかにされつつある。編纂者シャマタデーヴァ（Śamathadeva）はネパール出身の人。本庄によれば瑜伽行派系に属するという。

4. 1 Śamathadeva on the Pratītyasamutpāda 本章は資料編を中心としており、この節（pp. 65–74）で世間品から一連の縁起経典（本庄良文『倶舎論所依阿含全表 I』私家版 1984, Chap. 3, No. 34–50 経に相当）を関連資料とともに紹介する。

【5. Dignāga's Marmapradīpa】 仏教論理学派の大成者、陣那（Dignāga）の手になるこのテクスト（Peking. 5596, Tohoku. 4095）は、先に見た "Saṅghabhadra" の作品と同様『倶舎論』の抄本であり、原典の内容を三分の一ほどに圧縮したものである。その意味で現存するかれの著作のなかでは最も独創性に乏しいが、ただし "Saṅghabhadra" には欠けていた第九破我品がこちらにはあり、その抄出の仕方には独特の性格が見られる。

この点についてはすでに櫻部建「陣那に帰せられた倶舎論の一綱要書」（『東海仏教』2, 1956）によってより詳細に報告さ

れている。すなわち陣那は破我品から、①プドガラなくして仏が一切智とされる根拠、②命者についての経典の無記をめぐる解釈、③識と相続にかんする議論、④無我説における業因・業果の関連性、という四つの主題（Pradhan ed. pp. 467, 469–470, 474, 477）だけを取りあげ、他を捨てているのである。①と②は犢子部、③と④は仏教以外の学派に対する批判から採られている。

陣那は犢子部から世親のもとに転向したという伝承がチベットにあるが、それが事実なら、ここで犢子部批判がもっと丁寧に扱われるはずである（M. Hattori; *Dignāga on Perception*, Harvard Oriental Series 47, 1968, p. 2）。本章はこの服部正明の指摘を紹介し、続いて破我品における本テクストと『倶舎論』の対応一覧表を示す（p. 75）。

なお本書によれば、破我品の結頌について、これはもと本テクストのオリジナルであったものが、後に誤って『倶舎論』本論に混入したのではないかという見解が出されているという（Ch. Lindtner "Adversaria Buddhica" *WZKS* 26, 1982）。というのは清弁（真作ではない）の *Madhyamakaratnapradīpa* (Peking. 5254, Tsa. 343a3) と Dharmendra の *Tattvasaṃgraha* (Peking. 4535, Nu. 97b7) がともに同偈を陣那に帰しているからである。しかし著者も言うように、それはむしろ両テクストが直接には陣那の抄本からこの偈を引用したために生じた誤解と考えるべきだろう。

【6. Pūrṇavardhana's Minor Commentary】 満増には先に見た *Lakṣaṇānusāriṇī* と同名の注釈がもう一本残されており、こちら（Peking. 5597, Tohoku. 4096）は前者の抄本と考えられている（cf. 中村隆敏「プールナヴァルダナの『随相論』抄本（1）」『三康文化研究所年報』19, 1987）。これは破我品を除く八品から成り、最後の定品のみ章題を欠く。

本書によれば、このテクストは異論師との論争が展開される箇所を多く取りあげている点に特色が見られるという。なお北京版ではそのなか 'Dul bzang 説なるものが九回ほど引かれる（Peking. Thu. 292a4, 292a8, 292b8, 293b1, 294a2, 300a2, 300a6, 301a6, 310a7）。著者はそれらがチョーネ版ではいずれも 'Dus bzang=Saṅghabhadra（衆賢）であること、またそのうち四例（292a4, 292b8, 301a6, 310a7）は称友（Wogihara ed. p. 140, *l.* 1; p. 159, *l.* 10; p. 408, *l.* 13; p. 657, *l.* 28）によって衆賢説と確認できることを報告し、先の『倶舎論』抄本 *Sūtrāmṛtipā* の作者問題、すなわちそれを Vinītabhadra ではなく Saṅghabhadra と見なすための傍証とする（p. 79–82）。

【7. Abhidharmāvatāraprakaraṇa and Sārasamuccaya】 このテクスト『入阿毘達磨論』（Peking. 5599, Tohoku. 4098）は、厳密には『倶舎論』注釈文献とは見なせないが、有部のダルマの体系をコンパクトにまとめた教義綱要書として近い関係にあるためここに取りあげられる。完本としてはチベット訳と玄奘の漢訳が現存する。『サーラサムッチャヤ』（Peking. 5598, Tohoku. 4097）はその注釈書であり、チベット訳のみ残されている。

チベット訳『入阿毘達磨論』は作者名を伝えないが、本書は漢訳に基づいてこれを Skandhila（塞建地羅）作とし、また普光や法宝の記述にしたがってかれを衆賢の師と見なす（漢文にかんする著者の記述は Van Velthem ; *Le traité de la decente dans la Profonde Loi de l'arhat Skandhila*, Louvain-la-Neuve, 1977 に拠っている）。一方、『サーラサムッチャヤ』の作者は不明である。

わが国では Skandhila という名がウイグル語文献からも支持されることが報告されているが（百済康義「入阿毘達磨論の注釈書について」『印仏研』29—1, 1980）、これを衆賢の師と直ちに同一視できるかどうかについては疑問視する向きもある（櫻部建『仏教語の研究』文栄堂、京都、1975, pp. 121–123）。

『入阿毘達磨論』の構成は八句義（aṣṭa padārtha）説、すなわち五蘊と三無為からなるダルマのカテゴリー体系に基づいている。まず色・受・想・行・識の五句義が順次に取りあげられ、続いて六因・五果・四縁への言及を挟んで、後半に虚空・非択滅・択滅という三句義が解説される。本書ではそのうち六因説と想句義に当たる箇所が資料として提出される（pp. 84–89）。

7. 1 Six hetus　六因説の教証を示すにあたって『サーラサムッチャヤ』(Peking. Thu. 385b) は言う《六因をまとめて説いた経典はすでに隠没している。しかしそれは後に再び「神々よりもたらされた」(lha rnams kyis bsnyad do)。また現存する別の諸経に散説されてもいる》（大意）。そこでひとつひとつの因に対してそれぞれ別の教証が引かれる。

これと同趣旨の解説は称友疏 (Wogihara. pp. 188–189) にも見られるが、著者はとくに、称友が「経の隠没」説だけを紹介しているのに対して、本テクストが「神々による伝授」という解釈を加えている点に独自性を見出している（p. 85）。ただし評者の調べたところでは、『順正理論』に《余師は言う、六因の義が説かれていた経典（増一阿含の増六）は久遠の時を経て隠没したが、尊者迦多衍尼子たちは瞑想のなかで天仙よりそれを授与された》という記述があり（416b）、著者の言う「神受」説はこれに対応すると思われる。

7. 2 On the term saṃjñā　『入阿毘達磨論』における想句義の解説 (Peking. Thu. 396b) ならびに『サーラサムッチャヤ』(Peking. Thu. 331a–331b) による注釈のチベット文テクストと英訳。注記において『倶舎論』および称友疏が比較される。

なお本書には言及されないが、『入阿毘達磨論』のオリジナル・タイトルは、厳密には *Prakaraṇabhidharmāvatāra* である（池田練太郎「『入阿毘達磨論』とその註釈書」『印仏研』35–2, 1987）。また教義の細部において、このテクストがしばしば『アビダルマディーパ』と著しい類似を見せる点には注意しておくべきかと思われる（cf. 吉元信行『アビダルマ思想』法蔵館、京都、1982, pp. 49–57）。

【8. Sthiramati's Tattvārthā】　本テクスト『倶舎論実義疏』(Peking. 5875, Tohoku. 4421) は、現存インド成立『倶舎論』

注釈のうちで最も大部な一本であり、最終章の破我品を除く八品に対する詳細な注釈である。作者は瑜伽行派の学匠として高名な安慧（Sthiramati, 510–570）とされる。本章では、まず従来の研究成果に基づいてかれの生涯と著作が紹介される（pp. 90–92）。

続いてテクストの資料概況が報告される。この『実義疏』はかつて漢訳されたことがあり、その抄出本と見なせる漢訳断片、および漢訳からの古代ウイグル語訳断片が敦煌より出土している。完本としてはチベット訳だけが現存するが、他の『倶舎論』注釈がみな西蔵大蔵経の「阿毘達磨」（mngon pa）部に収められているのに対して、このテクストだけはなぜか「雑」（sna tshogs）という最後の部門に入っている。さらに奇妙なことに、チョーネ版には収録されていない（p. 93）。

本テクストは今日 *Tattvārthā Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā* というタイトルで知られているが、もともとは *gNam lcags thog zer=Karakāśani* と題されていたという。この書名は『順正理論』の別名『倶舎雹論』を連想させて興味深い。両タイトルの類似についてはわが国でも注目する研究者がいたが、本書（p. 94）によれば、この点に初めて注意を促したのはワシリエフ（V. Vasiliev; *Buddizm, ego dogmaty, istorija i literatura*, Sankpeterburg 1869, Vol. III, p. 137, note. 3）であるという。

なお続いて本書（pp. 94–95）に紹介される奥書の全訳を含め、以上の関連情報は、わが国ではすでに江島恵教「スティラマティの『倶舎論』註とその周辺—三世実有説をめぐって—」（『仏教学』19, 1986）に詳しく紹介されている。またウイグル訳については、近年その全文にわたる日本語訳が公刊された（庄垣内正弘『古代ウイグル文　阿毘達磨倶舎論実義疏の研究Ⅰ』〜『Ⅲ』松香堂、京都、1991–1993；この成果に対して本稿筆者は『仏教学セミナー』54, 1991 および『史学雑誌』103–6, 1994 それぞれの「書評」欄に詳しい論評の機会を得た。併せて御参照いただければ幸いである）。

チベット訳『実義疏』がしばしば翻訳を断念してサンスクリット文をそのまま音写し、ときには割注のかたちで訳を挿入していること、そしてその音写には意味不明瞭なものも少なくないことは研究者たちに知られているが、本書の著者もその訳文の難解さを指摘する。また本テクストに衆賢をはじめとする多くの異論師説が紹介されており、なかでも 'Phag pa'i bang=Āryadasa という今日では知られていない論師の見解が、界品だけでも八回（Peking. To. 34b5, 35a4, 43b1, 44a3, 58a6, 61a7, 77b8, 86a8）にわたって引用されていること（これについては松濤泰雄「Tattvārtha における異論師説（1）」『印仏研』33–1, 1987 も併せて参照されたい）、さらにテクストの記述が満増釈とよく一致しており、称友とも対応が認められることなどが続けて報告され、その詳細な比較研究が今後の課題とされる（p. 95）。

8. 1 Vaibhāṣikas on the pratītyasamutpāda 本節では『倶舎論』第三章世間品に見られる世親の十二縁起観（Pra-

dhan ed. pp. 139–140) の英訳と、それに対する安慧釈のチベット文校訂テクストが資料編として提出されている。安慧釈には満増釈の対応箇所が示され、重要な部分には英訳が付されている (pp. 96–110)。

四

本書は最後に **III. Concluding Remarks** (p. 111) を設けてこれまで取りあげた諸文献を再び手短に概観し、それらのなかでも称友疏こそ『倶舎論』の注釈学的伝統の highest achievement である、という著者の見解をもって結ばれている。

チベット訳で残されている『倶舎論』関連文献の量は膨大であり、その全てを一挙に扱うには自ずと限りがある。本書は各文献に応じてそれぞれの特徴を伝えるトピックを選ぶという手法をとっているが、対象の数が多すぎて個々の考察がやや浅くなった観は否めない。たとえば第二部の最終章で安慧釈世間品から十二縁起の解説を紹介し、注記において『倶舎論』、称友、満増の対応箇所を出しているが、これらそれぞれの解釈の違いなどについての詳しい検討が欲しかったと思う。

また先にも述べたような、漢文諸資料および日本語論文の成果をほとんど参照していないことに由来する情報不足も惜しまれる。もっとも著者が東欧の出身であること、あるいは逆にわが国における今日のアビダルマ研究が、たとえば本書に活用されているフラウワルナーの Abhidharma-Studien など、欧米圏での貴重な成果を十分に反映しえているか、という点を考えると、このことはむしろ、日本の研究者も今後はもっと欧文による論文発表の機会を増やし、海外の研究者との交流を果たさなければいけないという反省を促す意味で、わたしたち自身の課題ともなろう。

とはいえ、上述したような資料的制約にもかかわらず一定の水準で本研究をまとめえた著者の力量には敬服したい。アビダルマ文献の研究史は長いが、チベット訳関連文献は未だ解明されるべき問題を多く残している。本書がこの分野に対する内外の関心をさらに集めるきっかけとなり、今後大いに利用されることを願う。(Apr/10/1994)

＊本書評では本書中のチベット語のローマ字表記をすべてワイリー方式に改めました。

Marek Mejor, *Vasubandhu's Abhidharmakośa and the Commentaries Preserved in the Tanjur*, Alt-und Neu-Indische Studien Nr. 42, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 1991.